車内恋愛

紅生姜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
車内恋愛

【Ｎコード】
Ｎ７１２７Ａ

【作者名】
紅生姜

【あらすじ】
大切なものを一度になくしすぎた彰は千枝と出会う。二人は車内で本当の恋をした。

第一章

「もっと別の出会いをしていたら、僕たちどうなっていたかな。」

「そんなこといわないでよ・・・彰のばか。」

ぼくと千枝がはじめて会った場所はインターネットという電脳空間のなかだった。現実世界のなかで出会ったわけではないし運命というのは大袈裟かもしれないけど、やっぱり僕たちの出会いは運命だったんだとぼくは思う。

そのころのぼくはものすごくつらい出来事が笑えるほど続いて、こころは荒みきっていた。

東京で個人経営の飲食店を営んでいたぼくの家は、ぼくが高校2年のときに地獄になった。経営不振になり一日中閉まったままの店のシャッターを、サラ金の取立て屋が毎日のように叩いていた。父親の自殺をきっかけに、母方の祖父母が住む愛知に移り住んだのは、それから間もなくのことだった。もともと体の弱かった母はすぐに体調をくずし、半年もしないうちに父のあとを追うかのように市民病院で息を引き取った。

それでも幸いなことに若年結婚だった曽祖父はまだ元気で、残されたぼくと二歳下の妹の真紀は特に不自由することなく生活できた。昔、母と母の兄が暮らしていたという二階の空部屋はそれぞれ、ぼくと真紀の部屋に変わった。

そんな嵐のような一年を終え、ぼくは高校3年に、真紀は高校1年になっていた。

高校生活では気の合う友達もできたし、また男子校ではあったが彼女も出来た。友達の紹介で知り合った志乃という子だった。志乃

は近くの女子高の生徒で、同じ女子高に入った真紀の先輩にあたった。何度か家にも連れ込んだこともあって、曽祖父や真紀に紹介したこともあった。気さくだけどとてもやさしい子で、人の悲しむ顔を見ることを嫌った。そんな性格なだけに、あの日のあの一言は悩んだ末のものだったんだろう。

「おせっかいになったら、ごめん・・。こないだ学校で真紀ちゃんを見たんだけど・・・周りの子たちにいじめられてたように見えたの・・。それで部活の一年の後輩にきいてみたんだけど・・・やっぱりそうだった。クラスでも孤立してるみたい・・」

今までに見せたことのない程悲しい眼をしながらこぼした一言だった。

真紀は父親の血を忠実に引いていたのだろう。

志乃に真紀のことを聞いた日から一ヶ月も経たないうちに、真紀は死んだ。自殺なのか事故なのかはわからなかったが、ぼくは真紀に何もしてやれなかったことを後悔した。真紀を傷つけないようにと思い、普段どおり振舞ったぼくの選択は結果的に間違いだった。曽祖父は真紀の短かった人生を嘆いていたが、真紀にとってこの高校1年の八ヶ月は途方もなく長かったのだとぼくは思った。

家族をすべて失ったそのころは大学入試まであと二ヶ月残すのみの、周りはもっぱら受験モード全開といった時期だったが、ぼくには関係のないことだった。曽祖父は金のことは心配いらないからと念を押してぼくに大学進学を勧めたが、大学に進むことは最初から考えていなかった。

志乃とは受験勉強に専念したいからと嘘をついて別れた。彼女を悲しみのはけ口にしたくはなかったし、なにより恋愛というものを続けていく気にはなれなかった。

三月。

友達は、一人、また一人とそれぞれの進学した大学のある地へ移り住んでいった。この地を一番最後に離れていった友達を見送ったのは、三月ももう終わろうとしている日だった。

その日、ぼくは千枝と出会った。

第一章（後書き）

初投稿です。
続きも頑張って書きたいです。（どのくらいの長さの話になるかわからないけど）
文章、文体の稚拙さは大目に見てやってくださいな。

第二章

三月二十六日。

最後の友達を見送った後、ぼくは途方に暮れていた。

就職先は決まっていなかった、というより就職活動自体していなかったのだが、家族を次々となくした境遇のぼくの気持ちを汲んでのことだろうか、曽祖父はそのことを別段とがめることもしなかった。だが、そんな彼らの心遣いがぼくの家へと向かう足を重くさせ、家にいることは少なくなった。

その日も例に漏れることなく、すぐに家へと帰ることはしなかった。とりあえず町の中心部に足を運んだが、家でなければ別に何処でもよかった。町にはたくさんの建物が競うようにひしめき合って、一見そこには多くの逃げ場があるように思えたが、そのなかの大多数の場所はぼくにとっては華やかすぎて逃げ場にはなりえなかった。ぼくは自分が一個人として存在できる場所を探していた。

たどり着いたのはある漫画喫茶だった。そこには自分も含めて多くの客がいたが、そこには他人は存在しないように思えた。誰もが自分の世界を作り出していた。そしてぼくも同じように自分の世界へと入っていった。

ぼくが選んだ漫画は、昔一度呼んだことのある漫画ばかりだった。しかし再び読み返してみることは意外に楽しかったし、なによりも、読んでいる間は昔に戻ったような感覚におちいることが出来た。

小学校時代に流行った格闘漫画の最終巻を読み終えた頃には、時

間は夜の八時をまわっていた。小学生時代には気づかなかったが、今読み返してみると設定にミスが目立つストーリーだった。そんなことを考えながら、周りを見回してみると、最初いた客のほとんどは別のひとに入れ替わっていた。そんな様子を見ながら、腹が減っていることに気づいたぼくは、いったん自分の世界から抜け出した。

晩飯をすませたあとゆっくりと自分の世界に戻ろうとしたとき、ぼくは初めて、この漫画喫茶にインターネット施設が備わっていることを知った。

ぼくの部屋にはパソコンはあったが、インターネットができる環境は整っていなかったので、インターネットは数えるほどしか利用したことがなかった。

とりあえずトップページを開いてみた。画面の右側には今日のニュースが並んでいる。

トップは若手漫才師と女優の電撃結婚の話題だった。ここのところ、若手漫才師のこういう手のスキャンダルが多いせいで、もうあまり驚かないのだが、世間に免疫というものはないようだ。それに続いて政治、スポーツのニュースが並ぶ。そしてその下には事件のニュースがあった。

「福岡の高校生、部室で首吊り自殺」

詳細をクリックすると、校長の記者会見の写真と記事が出てきた。学校側は、おとなしい子だったが自殺する理由は見当たらないとの見解を述べていた。

理由もなく自殺するわけがない、とぼくは思ったが、理由が他人

にわかるわけもない、とすぐに自分の意見を遮った。

「親父も真紀も・・・」

彼らがどんな気持ちで死んでいったのか、ぼくにはわからなかった。

そして、どういうわけか、ぼくはトップページの検索欄に「自殺」と打ち込んでいた。

左クリック五回。

ぼくが千枝と出会うまでにかかった時間だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7127a/

車内恋愛

2011年1月27日02時26分発行